

エシカルを着よう。

ファッション・ジャーナリスト
生駒芳子
責任編集

いこま・よしこ VOGUE、ELLEを経て、04年よりmarie claireの編集長を務めた後、08年独立。現在はファッション、アートからエコ、社会貢献まで広い視野でトピックを追い、新しいメッセージを発信するファッションジャーナリストとして、執筆、講演、プロジェクト運営など活動中。グリーン・EXPO、オーガニックEXPOでファッション、ビューティ部門のアドバイザーとなる。NPO 法人「サービス・グラント」の理事。2010年秋より、オーガニック・テキスタイル世界基準「GOTS」の地域代表を務める。
blog: 1oven.com / blog.glam.jp
twitter yoshikoikoma

1980年代後半から20年余、パリ、ミラノのコレクションを取材し続けてきた私にとって、2000年を超えた頃から観察ポイントが1つ増えた。

それは「地球温暖化が、いかにキャットウォークに影響を与えるか」――。

それまで、ファッションの誌面を作る上で、エコロジーやエシカル（倫理的な）といったことを意識することはほとんどなく、そうした話題はファッションとは違った次元で存在すると思われてきた。

しかし、天候の変化の異常さを肌で感じるこの時期を機に、私の意識は少しずつ変わっていった。

2004年から雑誌「マリ・クレール日本版」の編集長を務めた私は、ファッション誌に社会問題を取り扱う記事を盛り込むという、今まで日本になかったタイプの女性誌を作り始めた。社会問題にも触れる記事をいくつも取り扱ったが、2007年、ロンドン特集を組んだ時に「エシカル」という言葉が目飛び込んで来た。ブレア政権下でアフリ

カに対して人権的配慮を伴う「エシカル政策」が掲げられて以来、ロンドンでは「エシカル」という言葉がブーム、社会現象になっているというのだ。

調べれば、ロンドンはファッションの面でもエシカル先進都市であることが分かってきた。すでにロンドンコレクションと平行する形で、エコやオーガニック、フェアトレードのブランドを集めた展示会「エステティカ」が開催され、大きな反響を呼んでいた。見回すと、パリでも2004年から、パリコレクションの後に、「エシカル・ファッション・ショー」が開催されている。ニューヨークでは、2008年に「フューチャーファッション」と題して、トップデザイナー 25人にオーガニックコットンを提供し、作品を作らせ、ニューヨークコレクションの幕開けの日にはショーを開催するという一大イベントが行なわれていた。

それらのニュースを耳にしているうちに、オーガニックコットンやフェアトレードの団体から次々と取材依

頼の声が編集部が届くようになった。「日本でもムーブメントが起こるぞ」と予感して、2008年に特集「エシカル・ファッションが未来の扉を開く」を組んだ。

これがおおよそ、日本のメディアでのエシカル・ファッション取り上げの出発点となった。それから2年。この「オルタナ」での特集が象徴するように、「エシカル・ファッション」という言葉は、ファッションの未来を占う一つの重要なキーワードとなりつつある。

目に見える部分だけが美しいのではなく、目に見えない部分も美しいファッション。トレーサブルなファッション。それは、21世紀のファッションの行く末、あるいはファッション産業のあり方を考える上で重要な視点だ。エシカル・ファッションが限りなく、質の高いクリエイション、楽しくおしゃれなスタイリング、気軽なショッピングシステムと結びついたとき、ファッションの次の扉が自ずと開かれると信じている。（生駒芳子）

オルタナが考えるエシカル・ファッションとは

1. オーガニックコットンなど環境負荷の少ない素材が使われている
2. 環境や人体に有害な化学薬品などを使わない加工プロセスを経て作られる
3. 児童労働の禁止、適正な賃金の保障といった「フェアトレード」の要素が含まれる
4. リサイクル素材を使ったり、リメイクで無駄を出さないモノづくりに取り組む
5. 手作りや伝統的なクラフトマン・シップを見直す
6. 購入すると社会問題の解決につながる寄付などができる
7. ワンランク上の製品にリサイクル・リメイクする「アップサイクリング」

文：生駒芳子（ファッション・ジャーナリスト）、木村麻紀（オルタナ副編集長）、吉田広子（オルタナ編集部）、富久岡ナヲ（ロンドン）、田中めぐみ（ニューヨーク）＝文中敬称略